

ENVIRONMENTAL REPORT 2025

INITIATIVES
FOR 2024



CONTENTS

● 編集方針	02
● 会社情報	02
● 環境統括責任者総言	03
● 戦略	04-08
ビジョンとマネジメント方針	04
ビジネスモデル	06
バリューチェーンマネジメント	06
重要な環境課題の特定方法	08
● ガバナンス	09-10
コーポレートガバナンス	09
リスクマネジメント	10
● パフォーマンス報告	11-19
環境目標と実績	11
環境マネジメント	11
環境会計	13
環境活動の取り組み	14
環境負荷実績	15
モーダルシフトの推進	16
循環型社会への取り組み	17
環境啓発活動への取り組み	18
生物多様性	19
● TOPICS	20
● 環境報告ガイドライン対照表	21

編集方針

報告対象組織

ホンダロジスティクスおよびホンダロジスティクスグループを報告対象組織にしています。

報告対象期間

2024年度(2024年4月1日~2025年3月31日)の活動を中心で報告しています。(一部、2025年度の情報も含まれています)

基準・ガイドライン等

環境省「環境報告ガイドライン2018年版」に準拠して作成しています。詳しい情報については、環境報告ガイドライン対照表のページ(P.21)をご参照ください。

発行時期

「環境レポート」は年1回(前回環境レポート発行日:2024年11月)発行しており、webサイトで情報を開示し、あらゆるステークホルダーへの説明責任を果たしています。

※ 本レポートにおいて株式会社ホンダロジスティクスは、“ホンダロジスティクス”もしくは“HLD”と記載します。また、“HLDグループ”とは、国内子会社及び海外現地法人を指します。

会社情報

会社概要

社名	株式会社ホンダロジスティクス
本社	東京都千代田区一番町6番地 一番町SQUARE 4階
設立	2006年10月1日
資本金	13億円(本田技研工業株式会社100%)
代表者	代表取締役社長 清水 宏
従業員	連結: 16,204名(2025年3月末現在) 単独: 1,123名(2025年3月末現在)

業績



事業拠点

本社組織	管理本部(東京)、デジタル推進本部(東京)、 経営企画室(東京)、技術本部(三重・栃木)
海外事業	13ヶ国26法人 ・海外事業本部(東京)

日本事業本部(東京・埼玉)
・事業所: 埼玉、静岡、三重、熊本、
　　パーツ用品(埼玉・三重)、製品物流部(埼玉・三重)
・輸送拠点: 輸送ネットワーク3ゾーン
　　(北海道、東日本、西日本)

2025年4月時点

事業内容



陸上・海上輸送
(完成車・部品)

流通加工

包装

物流機器商品
開発・販売

保管

輸出入

納入代行

引越、その他

システム開発

環境統括責任者緒言

夏の気温は年々上昇しており、2025年は前年を更に上回る酷暑となりました。世界各地で記録的な高温による熱波災害が相次いでおり、欧州12都市では7月初旬までの10日間で約2,300人が熱波の影響で死亡するなど、人命に関わる災害として危険視されています。WMO(世界気象機関)は、2030年までの世界平均気温は、産業革命以前と比較して1.2~1.9度上昇すると予測しており、特に北極圏では他の地域より3.5倍の速度で温暖化が進んでいます。「今時点で制御の兆しが見られず、私たちの日常生活や経済、生態系、そして地球への悪影響が拡大する恐れがある」と警鐘を鳴らしました。

世界の2024年度CO₂排出量は、23年度に比べ0.8%増加し、総量378億トンとまた観測史上最高値を記録しました。地球環境に与える影響は確実に拡大、加速している状況であり、地球はあらゆる場所のあらゆる人々にとって益々過酷で危険な場所になろうとしています。環境問題は待ったなしの早急な対策が必要になっております。

日本国内においても、観測史上最高気温が記録され、40度超の地点数も過去最多となりました。暑い季節が長くなることで、豪雨災害の拡大や農作物にも影響が出始めています。こうした状況で、日本政府が表明している目標は

- 2030年度の温室効果ガス削減目標を2013年度比 46%削減
※更に50%の高みへ向け挑戦
- 2035年までに乗用車新車販売における電動車100%化の実現
- 2050年度までに温室効果ガス排出を実質ゼロにする「カーボンニュートラル」脱炭素社会実現

を謳っており、自動車産業界をはじめ、日本社会全体で環境負荷低減に向けた取り組みが急務となっております。



Hondaは環境負荷ゼロ社会の実現に向け、「Triple Action to ZERO」を掲げ、「カーボンニュートラル」「クリーンエネルギー」「リソースサーキュレーション」の3つを大きな取り組みのコンセプトとし、この地球上で人々が永続的に生活していくために、2050年までにHonda製品だけでなく企業活動を含めたライフサイクル全体で「環境負荷ゼロ循環型社会」の実現に向け取り組みを加速させております。また、2050年カーボンニュートラルの着実な実現に向けて、CO₂排出量を2019年度比で46%削減すると目標を打ち出しました。これは国の目標値をはるかに上回る高い目標となります。この「野心的な目標」の実現に向けて、ホンダロジスティクスもHondaグループの一員として、ロジスティクスの分野でHondaグループ各社と連携し、難題に立ち向かい、挑戦を続けていかなくてはなりません。

ホンダロジスティクスは2030年ビジョンに「包括的かつ主導的なHonda物流のリーディングカンパニー」を掲げ、取り組みを加速させております。

これまで培ってきたノウハウを活かし、物流・輸送業務の効率向上やモーダルシフトはもちろんのこと、倉庫集約などの省エネ施策を展開すると共に、再生可能エネルギー活用に向けた環境への投資を実行し、ホンダロジスティクスグループ一丸となって大きな難題をクリアし、ステークホルダーから信頼され、存在が期待される企業となるよう引き続き努力して参ります。

2024年度の全社環境目標では2013年から2019年と基準年を変更し、固定源▲23.35%、移動源▲14.75%の削減目標を打ち出しました。固定源の実績では▲8.8%と結果は至らなかったものの、太陽光設備導入など新たな環境負荷低減施策に取り組み、2025年は目標達成へと繋げてまいります。移動源では▲29.5%を達成することができました。また、プラスチック廃棄物の削減目標も設定し、2022年度比▲0.6%に対し、▲2.7%を達成し、排出したプラスチック廃棄物の再資源化と熱回収量拡大への取り組みも進めております。

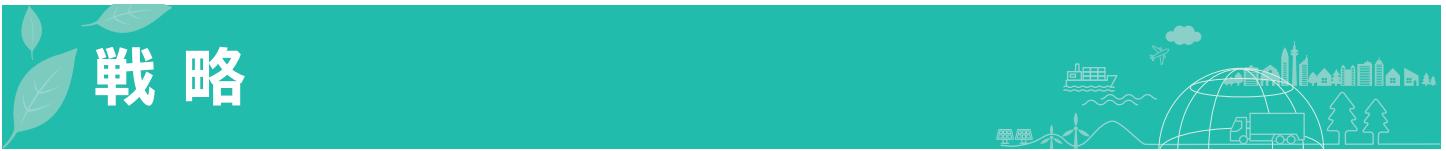
今後も「次世代へ繋がる環境活動の構築と環境負荷低減への取り組み」を強化し、CO₂排出量削減の目標達成に向けた企業努力を継続的に実致します。

この環境レポートは、当社の環境への取り組み内容をより多くの方々に知っていただき、皆様とのコミュニケーションを深めることを目的としており、今後の環境活動へ活かしていきたいと思いますので、忌憚ないご意見やご感想をいただけますと幸いです。

引き続き、当社の環境活動へのご理解とご協力をよろしくお願い致します。

取締役／環境統括責任者

湯浅俊夫



戦 略

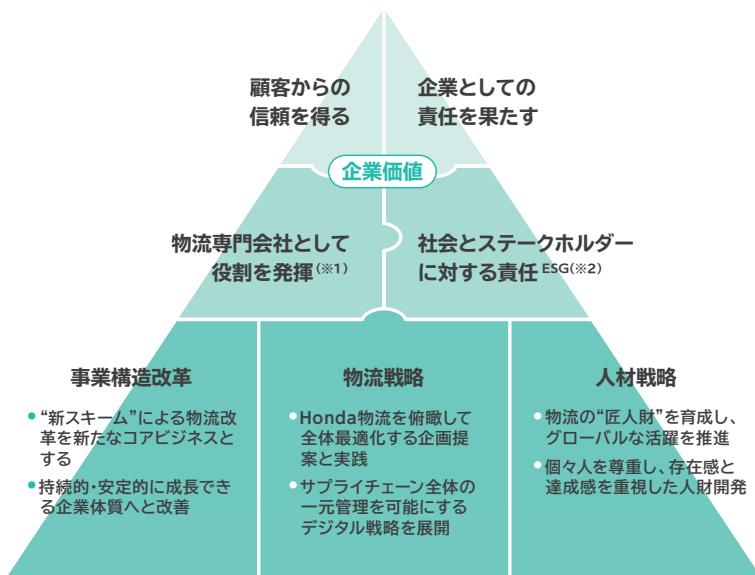
ビジョンとマネジメント方針



2030年ビジョン

『2030年ビジョン』は、私たちが目指す方向性を明確にし、HLIグループで働く全従業員と共有を図り、志をひとつにするために策定されました。私たちは、Hondaの物流にとって、「必要不可欠な存在」となるべく、Honda物流のリーディングカンパニーを目指し、社会と顧客にグローバルで貢献してまいります。

包括的かつ主導的な Honda物流のリーディングカンパニー



HLIグループ全社方針

HLIグループの総合力を結集し、 新たな領域への創造・実践を果たし、 Honda物流戦略パートナーへ 変貌を遂げる

激変する環境変化に対し、個々の力を結集して HLIグループの総合力で乗り越えていくために、私たち HLIグループは、新たな領域への創造・実践を果たし、新しいことへの挑戦、飽くなき探求、実践の積み重ねによって、顧客から期待・信頼されるパートナー企業をめざします。

HLIグループに求められる責任を果たす



発想力

- これまでの仕事の進め方や考え方によらわらず、新時代を切り開く新たな視点から物事を観ること



提案力

- 相手にわかりやすくこちらの意図を伝える
- こちらの考え方を理解させ、行動に移してもらう



実行力

- 計画を実現するための段取りと想定外の事象が起こってもそれを乗り切る柔軟性





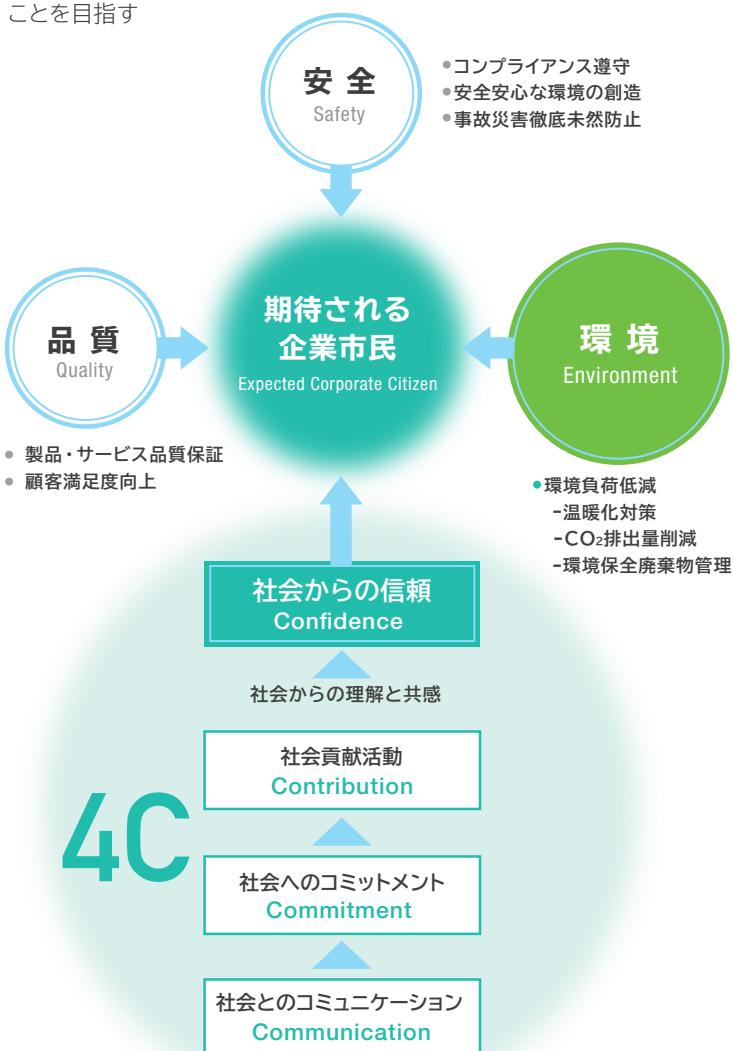
グローバル環境宣言

わたしたちは、地球的視野に立ち、社会の責任ある一員として
すべての企業活動を通じて、地球環境の保全に積極的に取り組みます。

1. わたしたちは、地球温暖化防止のため、業務の効率化をはかって、省エネルギー活動を推進し、事業活動で発生するCO₂排出の削減に努めます。
2. わたしたちは、循環型社会に対応し、廃棄物の分別や資材の再利用をはかって廃棄物の削減に努めます。
3. わたしたちは、事業活動に関連する法的要件やルールを理解し、順守に努めます。
4. わたしたちは、環境コミュニケーションに取り組み、地域社会との連携を図り、地球環境の保全に努めます。

安全・品質・環境への取り組み

お客様、お取引先、株主、地域社会など全てのステークホルダーから存在を期待されるコーポレート・シチズン（企業市民）となることを目指す



環境の基本的な考え方

安全・品質・環境 全社方針

企業を取り巻く環境変化とニーズを素早く捉え
全てのステークホルダーの期待を超える
サービスを提供する

◇安全：職制安全の徹底により社会の模範となる『危機ゼロ』の実現
◇品質：顧客から信頼され、環境変化に応じた品質保証へ進化
◇環境：HLI Gr.で地球環境の将来に向けた負荷低減の『義務と責任』を果たす

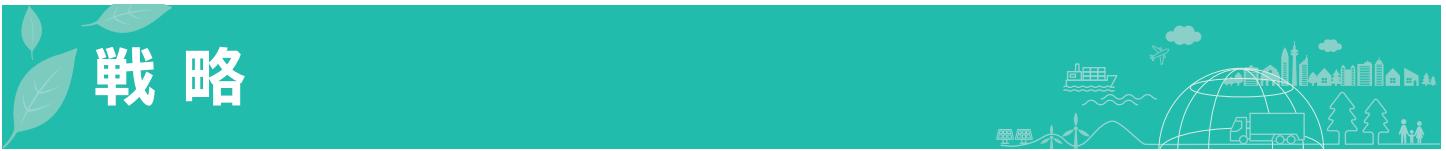
行動指針

- ①コンプライアンスの強化
安全・品質・環境に関する法律、社内規則、社会規範を遵守し、地域社会・お客様・お取引先・従業員等の信頼を高めることに努める
- ②継続的な改善
5Sを徹底し、快適な職場環境を維持構築し、仕事の「ムダムリムラ」を排除した、効率的かつ効果的な安全・品質・環境の改善を積極的に推進する
- ③リスクの軽減
あらゆる活動における安全・品質・環境の危険性、有害性、環境負荷を軽減・除去することに努める
- ④コミュニケーション
地域社会・お客様・お取引先・従業員と適切なコミュニケーションを図り、積極的な安全・品質・環境活動の実践に努める
- ⑤自律・教育・協調
主体性と責任を持ち、互いに連携・協調し合いながら、組織力の向上に努める

2025年4月1日
安全統括責任者
品質保証責任者
環境統括責任者

HLI Honda Logistics

高木俊夫

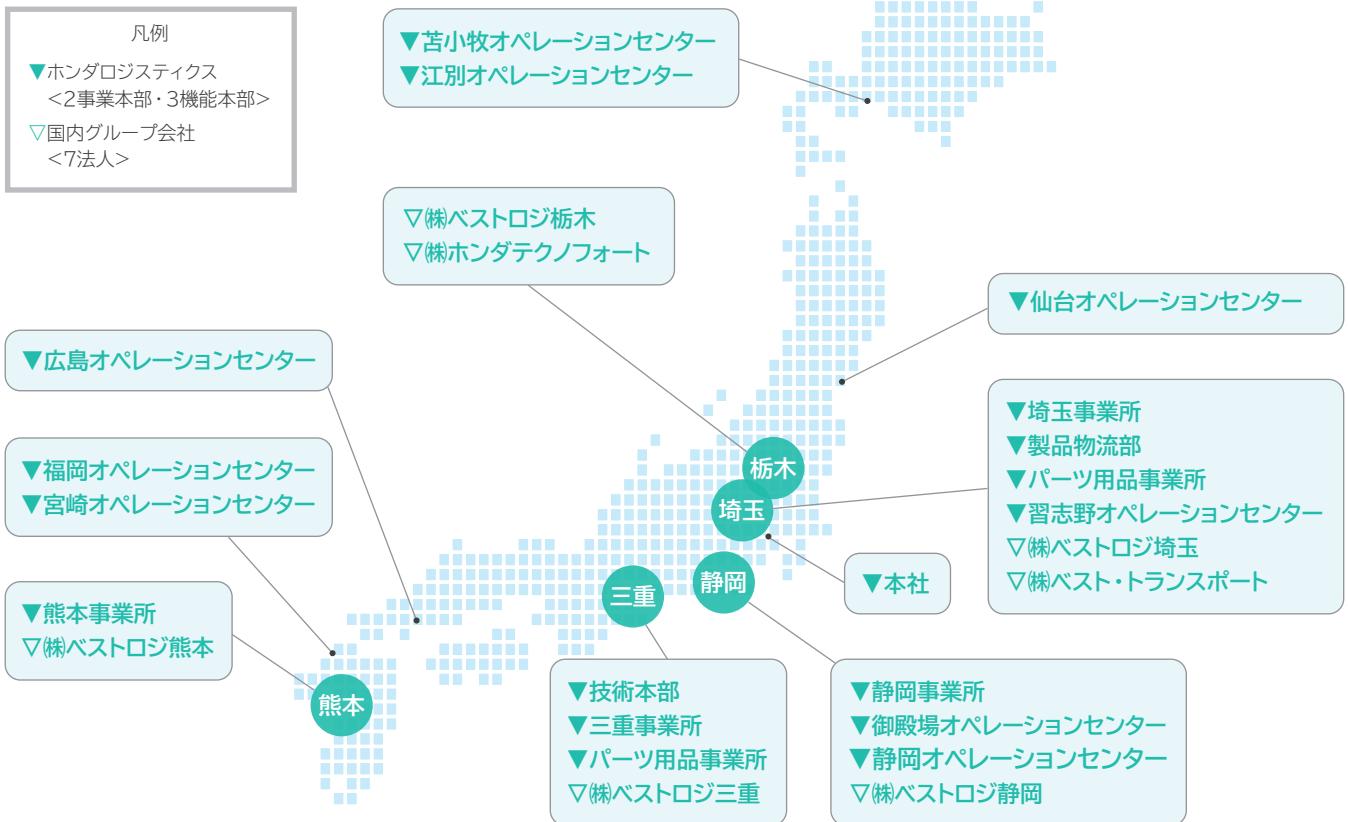


ビジネスモデル／バリューチェーンマネジメント



グローバルネットワーク

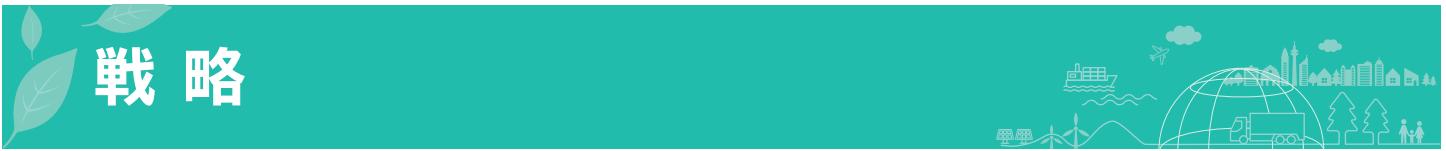
日本



海外



2025年4月時点



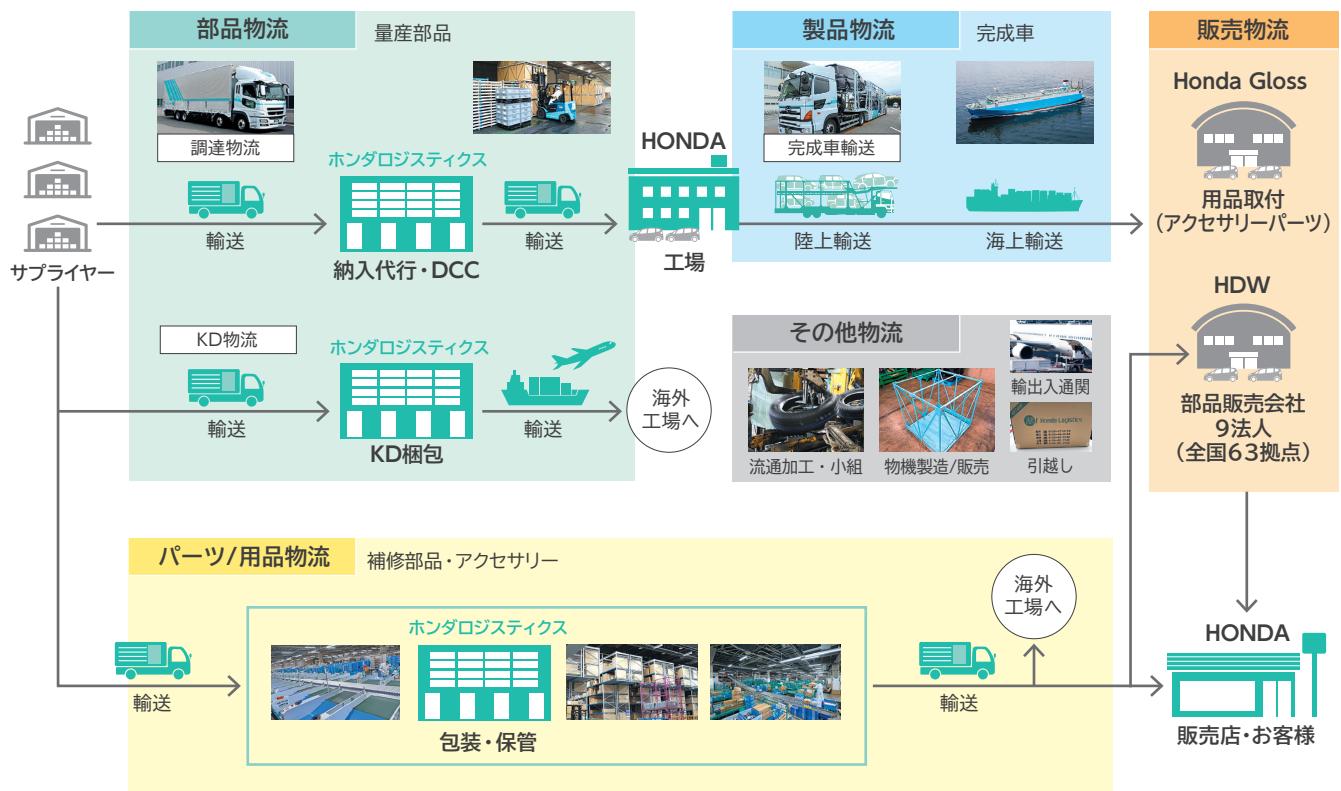
ビジネスモデル／バリューチェーンマネジメント



主な業務／HLIのバリューチェーンの概要

●事業活動におけるバリューチェーンマップと環境課題

事業活動	部品物流			製品物流			販売物流		パーツ/用品物流		その他物流		
	調達物流		生産物流	KD物流	完成車輸送			Gloss	HDW	包装保管	輸送	流通加工小組	物流機器製造・販売
	輸送	納入代行	DCC	KD梱包	陸上	海上	完成品梱包	用品取付	補修部品				
環境課題	地球温暖化	地球温暖化	地球温暖化	地球温暖化	地球温暖化								
	大気汚染	廃棄物	廃棄物	廃棄物	大気汚染	大気汚染	廃棄物	廃棄物	大気汚染	廃棄物	廃棄物	大気汚染	廃棄物
		化学物質	化学物質	化学物質		海洋汚染	化学物質	化学物質		化学物質	化学物質		化学物質
		生物多様性	生物多様性	生物多様性			生物多様性	生物多様性		生物多様性	生物多様性		生物多様性



※1 DCC(Distribution & Consolidation Center):サプライヤー引き取りから、各納入先(製作所・KD・パート、二次サプライヤー)までの一貫物流業務

※2 KD(Knock Down):海外向け部品のバンニング・保管・詰替え・検査及び輸送業務

※3 サプライヤー:部品メーカー



バリューチェーンマネジメント／重要な環境課題の特定方法



環境配慮 施設／設備・サービスの状況

● 環境に配慮した施設／設備の拡充

ホンダロジスティクスでは、12年ぶりに三重地区で新しい物流拠点：鈴鹿アッセンブリーセンター（※以降鈴鹿AC）を建設しており、三重事業所 組立課のタイヤ組立業務を行っています。

鈴鹿ACは、環境に配慮し工夫を凝らした建物です。特に、太陽光発電システムを導入し、CO₂排出量は年間292.5t-CO₂削減を見込んでおり、自然エネルギーを活用して、タイヤ組立設備や空調などの最新省エネ設備を動かしていきます。

これにより、『ZEB』（Net Zero Energy Building）の基準を満たし、快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した環境に配慮した設計となっています。



● 環境対応車両の導入

輸送にともなう環境負荷を低減するために、当社の営業車両はすべて新長期規制適合車を導入しています。

また、デジタル式運行記録計[※]の導入により、各車両の動態の可視化により燃費の向上も図っています。

[※]デジタル式運行記録計

車両に搭載した機器により速度、時間、回転数などを自動的にメモリーカードに記録する装置



ホンダロジスティクス 海外グループ

ホンダロジスティクスは、海外にも展開しており、各現地法人においても環境負荷低減を目的とした投資を積極的に推進しています。

海外での取り組みの一例

● EVヤードトラックの導入

NSE(New South Express, LLC)は、物流ヤードで稼働する「EVヤードトラック」を導入しました。Hondaが掲げる「2050年カーボンニュートラル実現」に基づいた環境負荷低減への対応の一環として脱炭素化を目指しています。



HLIの重要な環境課題

環境側面を決める際は、強み (Strengths)、弱み (Weaknesses)、機会 (Opportunities)、脅威 (Threats) から「外部内部の課題」ならびに「利害関係者のニーズと機会」を気候変動への配慮も含めて洗い出し、それらを踏まえ「著しい環境側面」を決定しています。決定した「著しい環境側面」に対して「リスクと機会」を特定し、「著しい環境側面」「順守義務」「リスクと機会」への対応について「重要な環境課題」と捉えて、全社で取り組みを行っています。

2024年度の重要な環境課題については、環境への影響度等に基づき「廃棄物の適切管理（順守評価・産廃処分現地地確認・廃プラスチック類の排出量削減／再資源化／熱回収）」、「電力使用量の最適化」、「環境緊急事態への対応（訓練・流出防止用資機材の管理）」、「環境関連法令の順守（順守評価・知識習得）」などが重要であると判断し特定しました。

4.1
外部・内部の課題

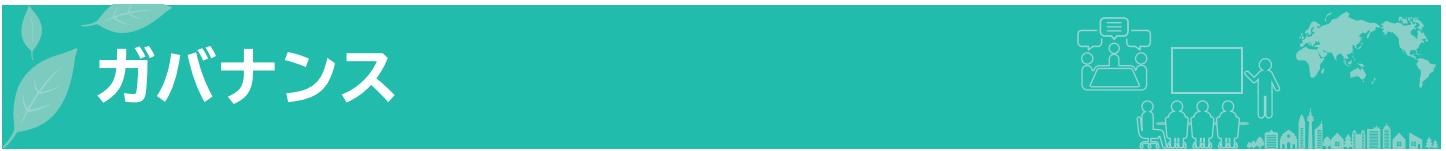
6.1.3
順守義務

4.2
利害関係者のニーズ
及び期待

重要な
環境課題

6.1.2
著しい環境側面

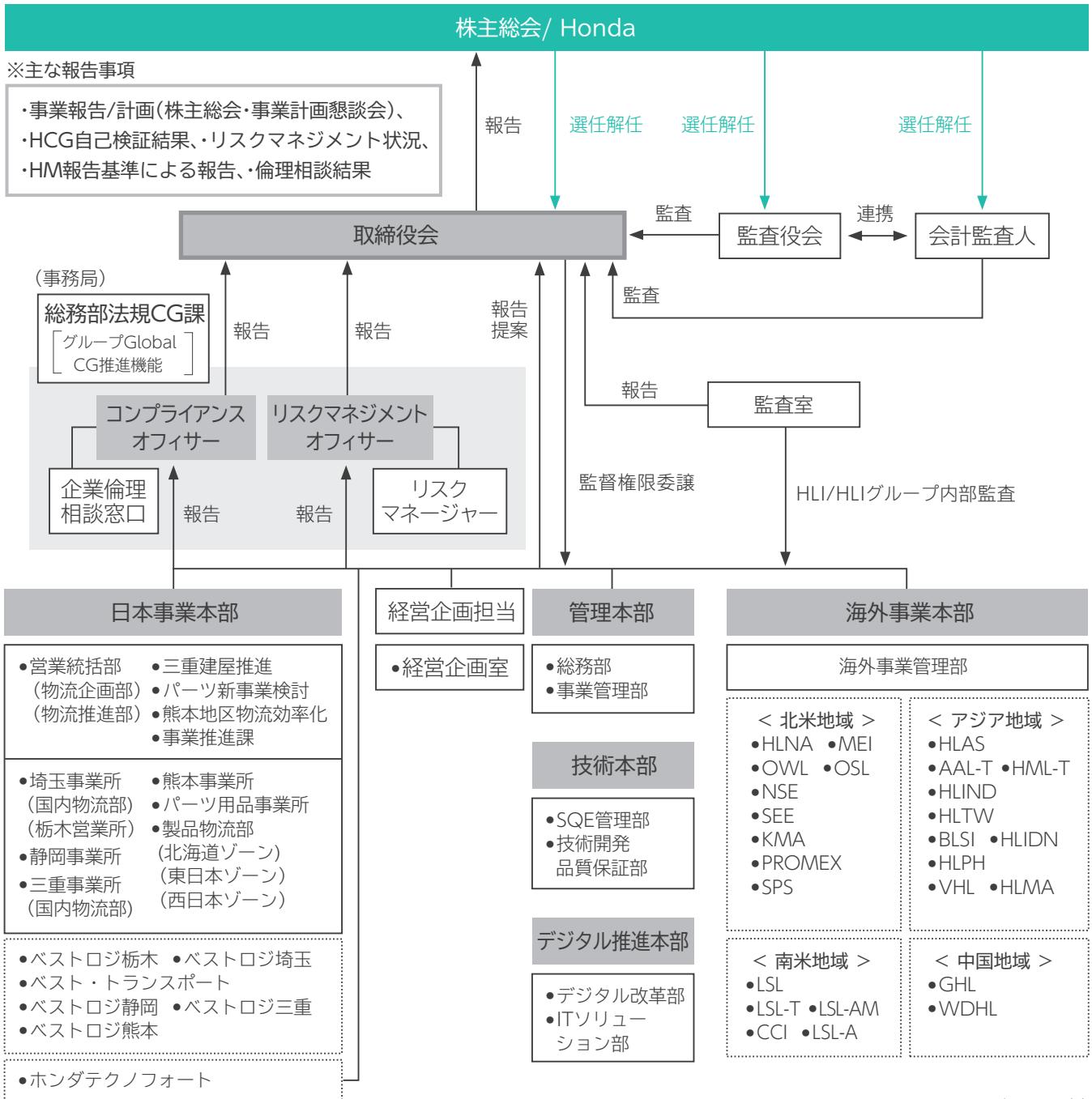
6.1
リスクと機会



コーポレートガバナンス

ホンダロジスティクス(以下、HLIという)は、国内グループ及び海外グループを含めたHLIグループの健全な企業経営を目指すために、「HLIグループコーポレートガバナンス体制」を構築して、ガバナンスの強化を図っています。

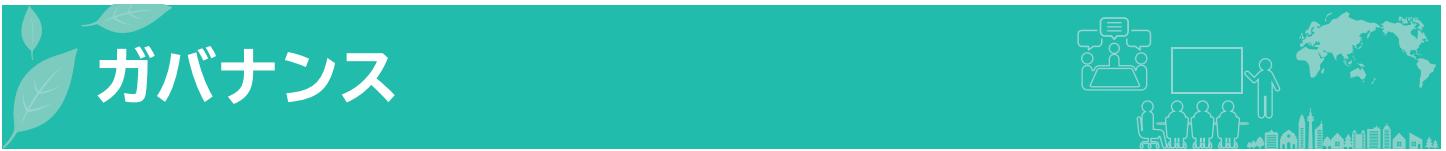
コーポレートガバナンス体制図



2025年4月1日時点

● コンプライアンス

法令・社内ルールの順守状況を評価するために、CG自己検証を実施しています。最新の環境法令や法令改正内容を反映した「コンプライアンスチェックリスト」を用いて年に1度実施しています。2024年度において、重大な環境法令違反の発生はありませんでした。



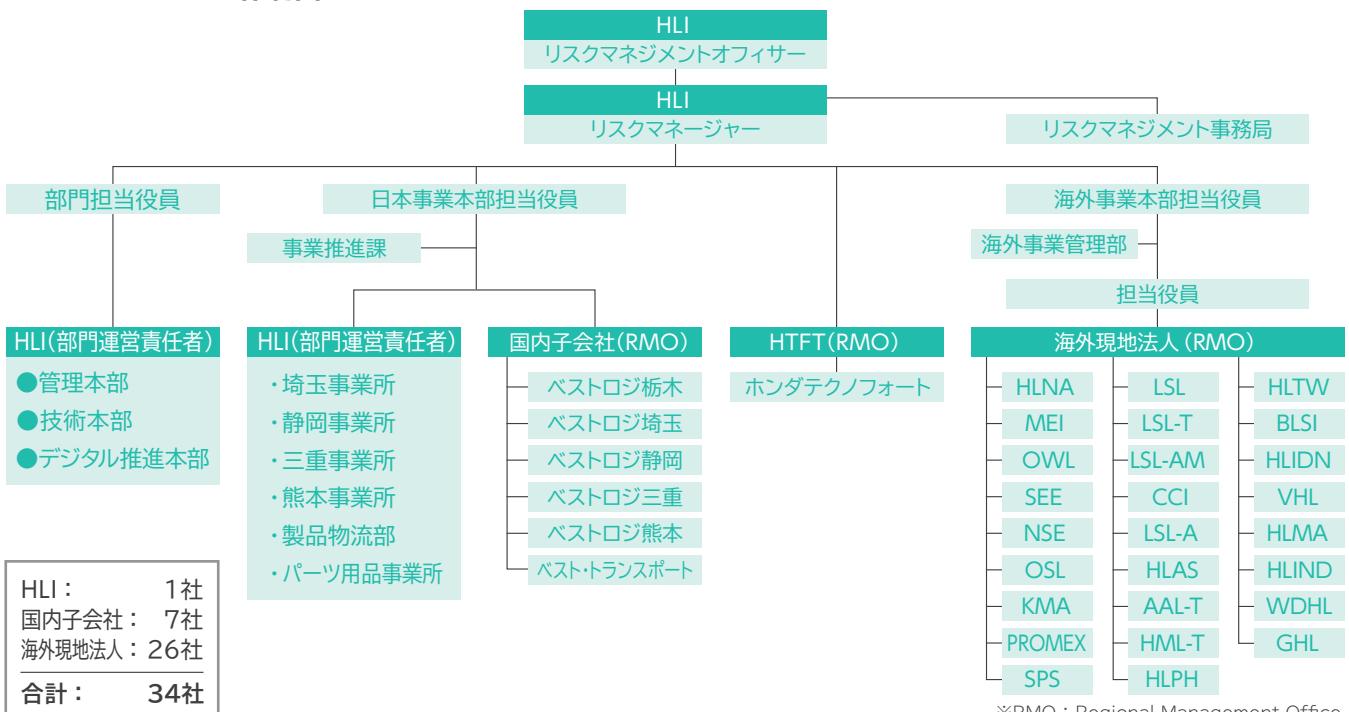
リスクマネジメント



リスクマネジメント体制の整備

グループ会社までを適用範囲として含む「HLIグループグローバル リスクマネジメント規程」を制定しています。この規程は、Hondaフィロソフィーに基づく企業活動の持続的な発展や経営の安定化を図ることを目的とし、事業に影響あるすべてのリスクを対象としています。HLIグループの各組織は、それぞれ自立したリスクマネジメント体制を構築し、自らの責任において、リスクマネジメントを推進しています。主な取り組みとして、Hondaグループ共通の手法・ツールを使用し、リスクを特定・評価・対応する「リスクアセスメント」をHLIグループ全社で行っています。危機が発生した際には、影響度に応じて、危機対策本部を設置し危機対応にあたることとしています。

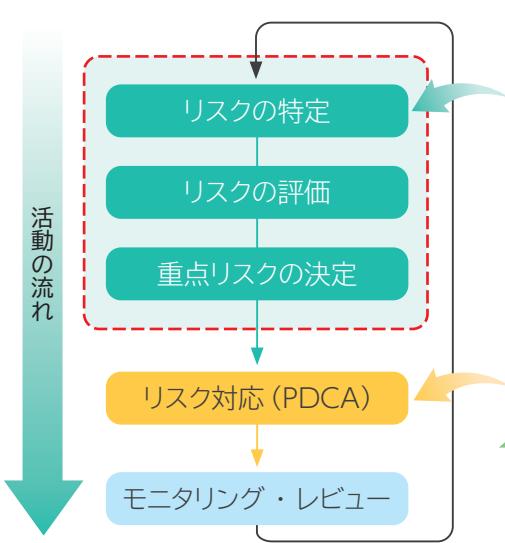
リスクマネジメント体制図



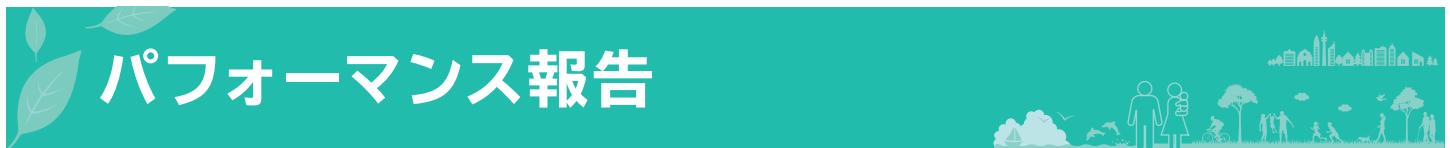
出典：HLIグループ グローバルリスクマネジメント規程 2025年4月1日時点

リスクアセスメント活動

事業を取り巻く潜在リスクを予見し、事前に対応を行うことでリスクを極小化することを目的に、年1回リスクアセスメントを実施しています。Hondaグループ共通のツールを使用し、予見されるリスク項目について、評価基準に基づきリスク評価を行います。また、そのリスク評価の項目の中から「重点リスク」を選定し、リスク軽減の取り組みを行っています。発生したリスクを考慮し、また今後発生すると思われるリスクを想定し、「環境リスク」の顕在化と対応に繋げています。



リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									
リスクアセスメント									



環境目標と実績



「環境基本方針」の実現に向けて、具体的な環境負荷低減目標を定めて環境活動を展開しています。

全社目標

CO₂排出量削減率

- 固定源
2019年度比『23.35%減』
- 移動源
2019年度比『14.75%減』

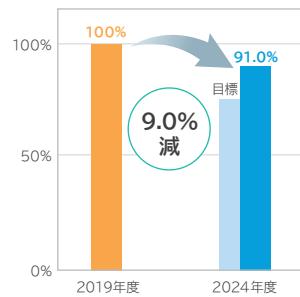
廃プラスチック類削減率

- 排出量削減
2022年度比『0.6%減』
- 再資源化・熱回収率
2022年度比『0.6%増』
※3ヶ年で計1%の目標値

削減達成状況

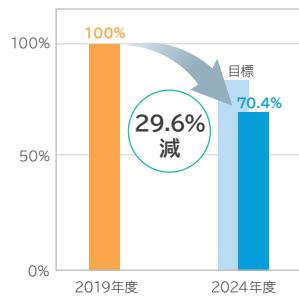
固定源CO₂排出量

2024年度目標値:
2019年度比『23.35%減』



移動源CO₂排出量

2024年度目標値:
2019年度比『14.75%減』



廃プラスチック類排出量

2024年度目標値:
2022年度比『0.6%減』



※ 基準年排出量を100%としてCO₂排出量、廃プラスチック類排出量の増減が何%まで達成しているかを表示
固定源については、2024年度単年では目標未達。2030年目標達成に向け、新たな施策を展開中。

環境マネジメント

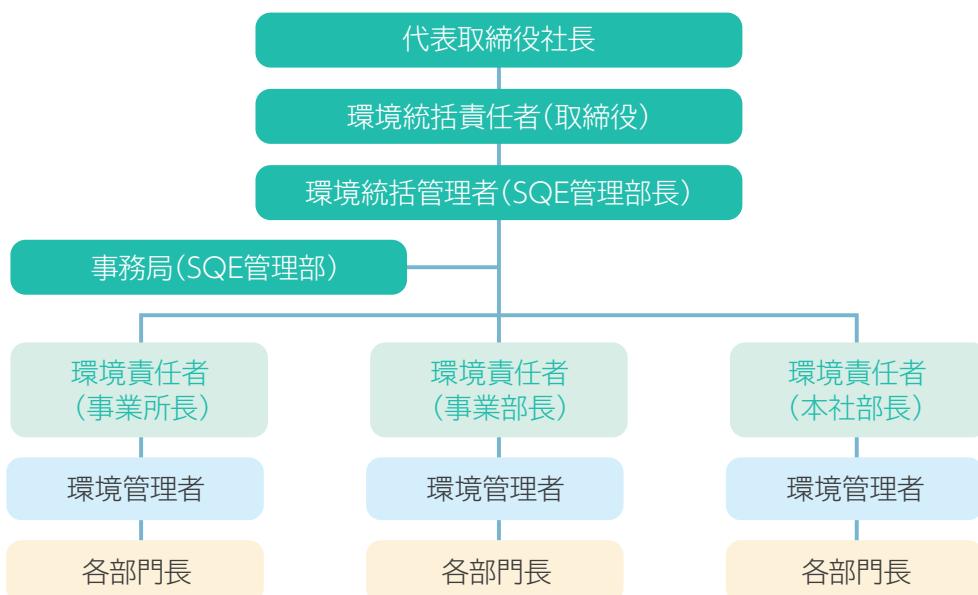


グリーンロジスティクスの実現に向けて、環境マネジメントを主体的かつ積極的に取り組んでいます。

環境推進体制

環境経営を取り組む仕組みとして、全社統一の環境マネジメントシステム(EMS)を導入しています。

本部、事業所、事業部ごとに環境責任者、環境管理者を選任し、全社施策・課題協議のため、環境責任者会議、環境管理者会議等を開催しています。



2025年4月時点

パフォーマンス報告

環境マネジメント



ISO14001認証取得

企業の継続的な発展に環境マネジメントシステムは不可欠との認識に立ち、1999年より、各事業所に環境マネジメントを導入し、ISO14001を認証取得しています。2009年に統合しマルチサイト化を経て、現在も環境マネジメントシステムに基づく活動を推進しています。

規格	ISO14001:2015 JISQ14001:2015
登録活動範囲	・自動車用タイヤの組立
関連事業所	・ロジスティクスセンター（三重県鈴鹿市） ・小川ロジスティクスセンター（埼玉県比企郡小川町）
認定機関	JAB および UKAS
審査機関	一般財団法人 日本品質保証機構

海外グループ会社 ISO14001認証拠点

- Midwest Express Inc (アメリカ) · Simcoe Parts Service Inc (カナダ)
- 武漢東本儲運有限公司 (中国) · Honda Logistics Asia Co.,Ltd. (タイ)

※2025年9月時点

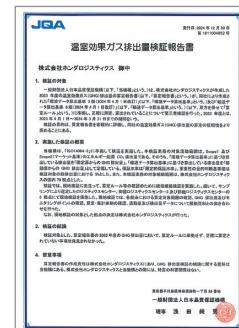


環境活動における外部評価

CO2排出量データの第三者検証

算定報告書を客観的に評価し、温室効果ガス(GHG)排出量の算定の信頼性をより高めることを目的に一般財団法人日本品質保証機構(JQA)による第三者検証を受審しています。

規格	ISO 14064-3:2011
算定範囲	株式会社ホンダロジスティクス 国内79拠点
現地検証対象	ロジスティクスセンター、御園ロジスティクスセンター3、鈴鹿ロジスティクスセンター
対象期間	2023年4月1日～2024年3月31日
対象項目	Scope1及びScope2(マーケット基準)のエネルギー起源CO2排出量



環境関連法令の順守

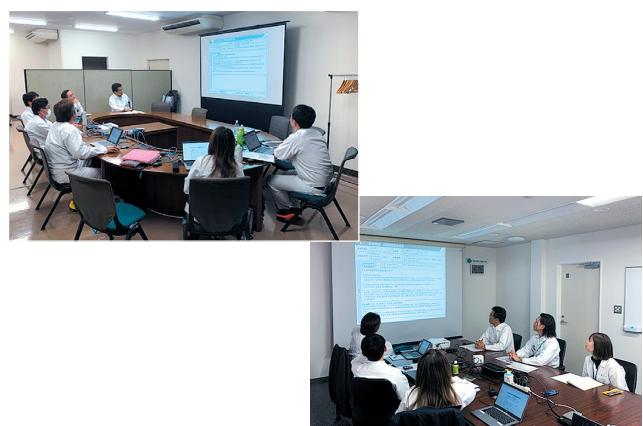
有害物質により大気、水質、土壤などの自然環境が汚染されたり、騒音、振動などにより生活環境が悪化したり、私達の健康で快適な生活に被害を及ぼす環境汚染の予防に関する法令・条例、協定・自主規制を遵守するために、環境管理者・環境推進委員・環境担当、及び国内子会社の環境活動推進者を対象とした社内外の法令研修の開催や受講を実施し、研修後に行う“アフターフォローテスト”から、定着度や強み・弱みの分析結果に基づく教育をするなど、知識の維持・向上を図っています。



2024年開催：環境法令オンライン研修
研修内容：各種環境法規制

環境監査

法令・規制要求事項が適合しているか、環境マネジメントシステムが有効に機能しているか、を確認するため、社内で編成された監査チームによる内部監査を実施し、登録機関による外部審査を受審しています。指摘事項に対しては、迅速に是正し、改善を図っています。



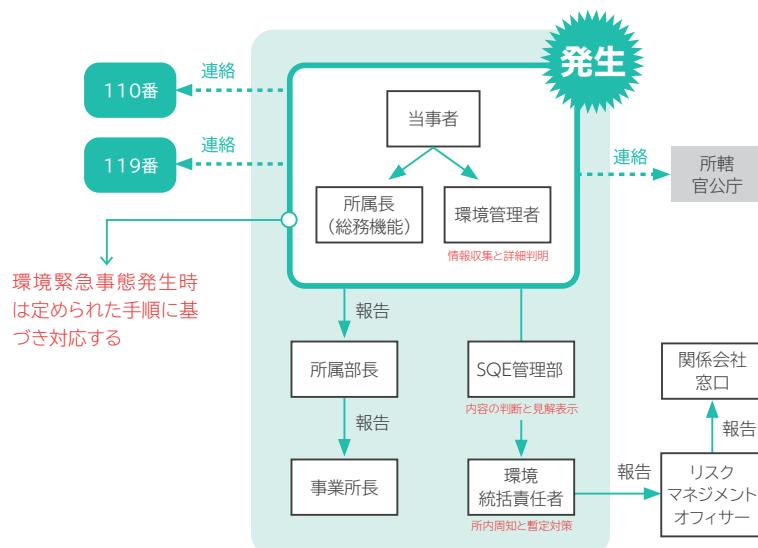
パフォーマンス報告

環境マネジメント



○ 緊急事態への対応

万一の事態を想定しオイル、燃料流出・火災の発生に備えて「環境緊急事態管理基準」を定め、訓練・テストを毎年実施しています。また、緊急事態が発生した場合は所轄官公庁への届出、地域近隣住民に対する避難、注意喚起を行う体制のもと、ルールに基づいて迅速な対応を図ります。



オイル・燃料流出対応訓練



消防訓練



防災訓練



環境会計

環境保全活動に関するコストを管理、分析、経営判断し、効率的かつ効果的なグリーンロジスティクスを推進しています。

○ 環境保全コスト

分類	主な取り組み内容	投資額	費用額
事業エリア内コスト	①公害防止コスト 大気汚染防止、水質汚濁防止、緊急事態対応資機材の購入など	44.1	14.4
	②地球環境保全コスト LEDや高効率空調など省エネ機器の導入・保守など	193.1	150.2
	③資源循環コスト 廃棄物の処理、処分など	0.0	132.0
④上下流コスト	環境配慮製品の購入、リサイクルなど	0.0	128.6
⑤管理活動コスト	環境関連要員の人件費、環境マネジメントシステムの維持、環境情報収集システム構築、社員への教育など	0.0	158.6
⑥研究開発コスト	リターナブル容器、無人搬送車などの研究開発設計など	0.0	96.5
⑦社会活動コスト	自然保護、緑化活動、地域イベントへの参画、環境保全団体への支援金など	0.0	1.7
⑧環境損傷対応コスト	土壤汚染の修復など	0.0	0.0
	合計	237.2	682

●集計対象: ホンダロジスティクス

●集計期間: 2024年4月1日～25年3月31日

●公表した数値には一部推計値を含みます。

●集計表の作成にあたっては、環境省より公表されているガイドライン、ガイドブックなどの環境会計に関する資料を参考としました。キャッシュフローをベースとし、減価償却費を除いた金額です。

○ 物量効果

環境施策および環境保全コストによる効果を定量的に把握、分析しています。

		2023年度	2024年度	物量効果
エネルギー使用量 (原油換算値)	kL	16,319	16,057	-262
CO ₂ 排出量	t-CO ₂	39,618	38,882	-736
水資源使用量	m ³	47,547	57,912	+10,365
廃棄物総排出量	t	4,777	4,346	-431

※算定方法: 2024年実績 算定省令改正反映

○ 環境効率

下記計算式で環境効率を定義し、算出しています。

※計算式: 事業規模(売上高) ÷ 環境負荷(CO₂排出量)



パフォーマンス報告

環境活動の取り組み

「全社環境方針」に基づき “顧客に効率的で環境負荷の少ない物流サービスや 製品を提案・提供する”ことでCO₂排出量の削減や地球温暖化防止に努めています。

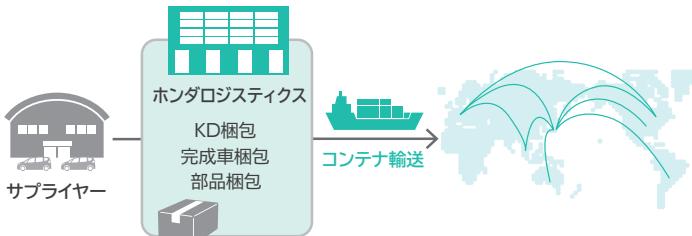
モーダルシフトを活用した物流

機動力のあるトラックと、環境にやさしく大量輸送が可能な船舶や鉄道を組み合わせることにより、輸送の効率化と環境負荷低減の両立を実現



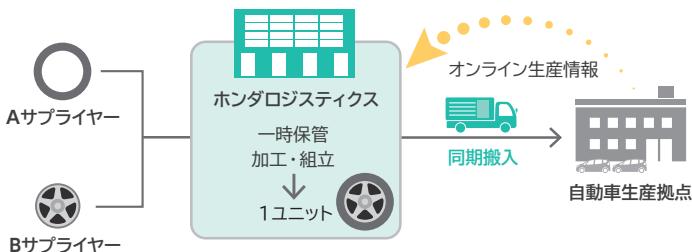
海上コンテナラウンドユースによる物流

輸出入で使用した空コンテナを港・倉庫に返却せずに次の輸出入のタイミングを調整し転用することで空コンテナの配送を削減し、環境負荷低減を実現



生産ラインと連動した同期搬入

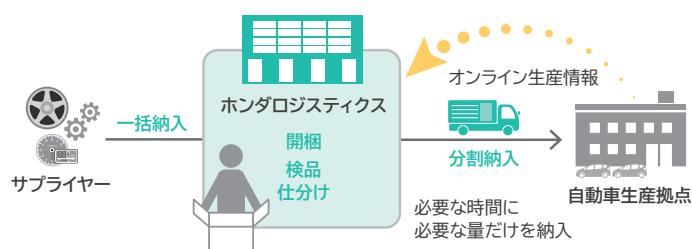
サプライヤーからの部品を各々生産拠点に供給するのではなく複数の部品をひとつの単位に組み立て、生産ラインと同期した搬入を行い、生産拠点への流入車両数を削減



DCC機能*による納入代行

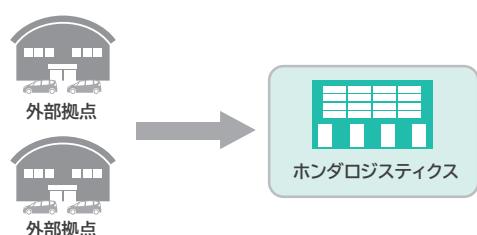
サプライヤーに代わり、部品の一括集約、開梱、検品、仕分けを行い、必要な時間に必要な量だけ、指定の部品を分割納入し、生産拠点への流入車両台数を削減

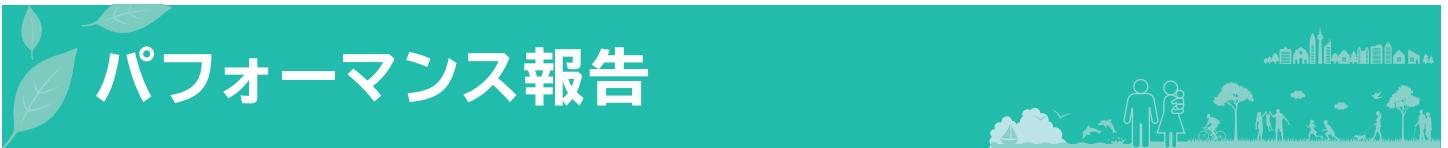
* DCC機能:「Delivery Control Center」の略であり、生産ラインに同期して部品を供給する中継基地。主に大量・多品種に仕入れられた部品を、一時的に保管して、運送物流形態から必要に応じてラインに合わせた供給スタイルにして出荷する一連の業務。



物流拠点の集約

近在に点在している拠点を集約することで、拠点間を移動する車両数を削減し、また、設備機器の効率的な運用により環境負荷を低減





環境負荷実績



グリーンロジスティクスの実現に向け、グローバルな事業活動によるHLDIグループ全体で環境負荷低減に取り組んでいます。
国内及び海外の2020年度～2024年度CO₂排出量、水資源使用量、廃棄物などの発生量について報告します。

ホンダロジスティクス

拠点の活動のCO₂排出量(固定源)



輸送活動のCO₂排出量(移動源)



水資源使用量



廃棄物発生量



有価物発生量

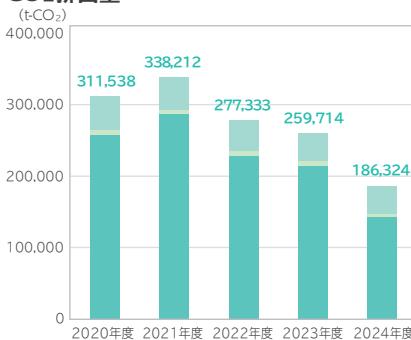


廃プラスチック類発生量

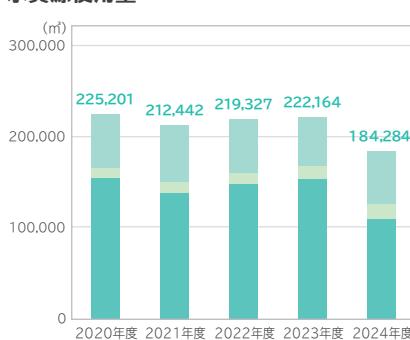


ホンダロジスティクスグループ

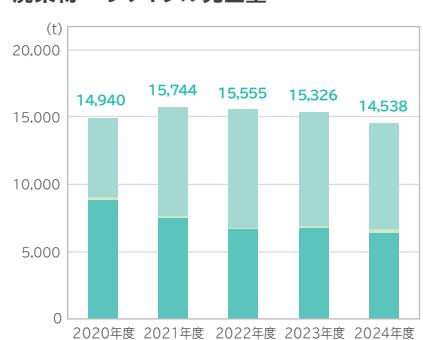
CO₂排出量



水資源使用量



廃棄物・リサイクル発生量



サプライチェーン排出量

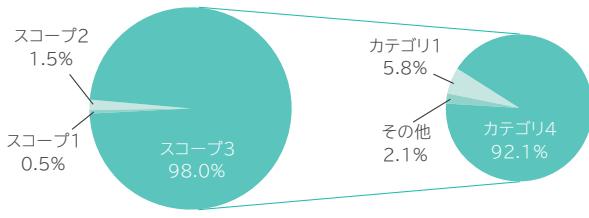
省エネ法などで管理が義務付けられている温室効果ガス(GHG)排出量、スコープ1、スコープ2に加えてスコープ3の管理にも取り組んでいます。

温室効果ガス排出総量

温室効果ガスの内訳	2023年度	2024年度
スコープ1：直接排出	2,510	2,930
スコープ2：エネルギー起源の間接排出	9,754	9,453
スコープ3： その他の間接排出	27,156 455,379 その他 合計	34,729 556,177 12,911 603,817
温室効果ガス排出総量	503,318	616,200

温室効果ガス総排出量に占める割合

スコープ3に占める割合



Scope1:自社での燃料の使用や工業プロセスによる直接排出

Scope2:自社が購入した電気・熱の使用にともなう間接排出

Scope3:Scope1,2を除くその他の排出量。15のカテゴリに分類されています。

・カテゴリ1:資源採取段階からサプライヤーまでの輸送や、包装材・事務用品などの物品の製造までの活動にともなう排出

・カテゴリ4:サプライヤーから自社に届くまでの輸送・荷役・保管にともなう排出

・その他のカテゴリの数字は、カテゴリ1*2・3・5・6・7・12の合計です。

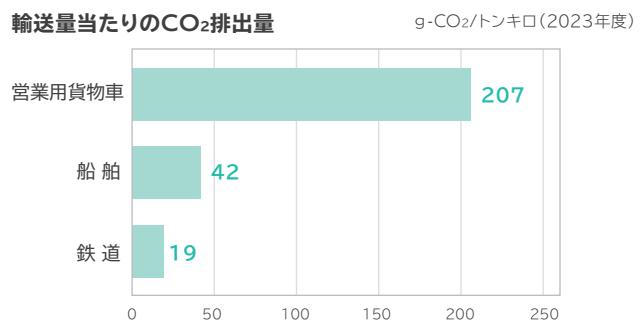
パフォーマンス報告

モーダルシフトの推進

環境負荷低減施策の一環として「モーダルシフト」を推進しています。

モーダルシフトとは、より環境負荷の小さい手段に切り替える対策のことであり、トラック輸送と比べて、エネルギー節減、二酸化炭素、窒素酸化物の排出抑制、道路交通騒音の低減、労働力不足の解消などのメリットが期待されています。

輸送量当たりのCO₂排出量



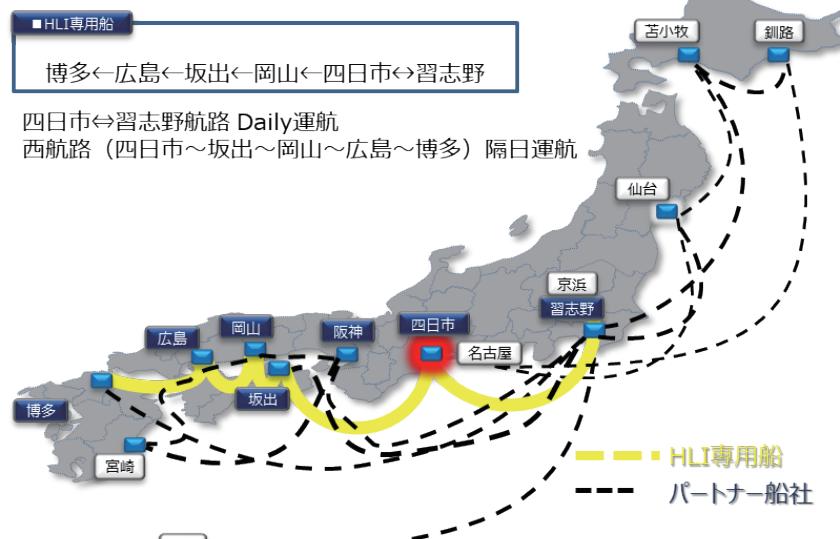
海上輸送

自動車運搬専用船4隻により、四輪完成車を大量かつ効率的に輸送できる海上輸送ネットワークを構築し、CO₂排出量の削減に大きな効果を発揮しています。

各自動車メーカーと共同輸送を展開しており自動車業界全体の地球環境保護に寄与しています。

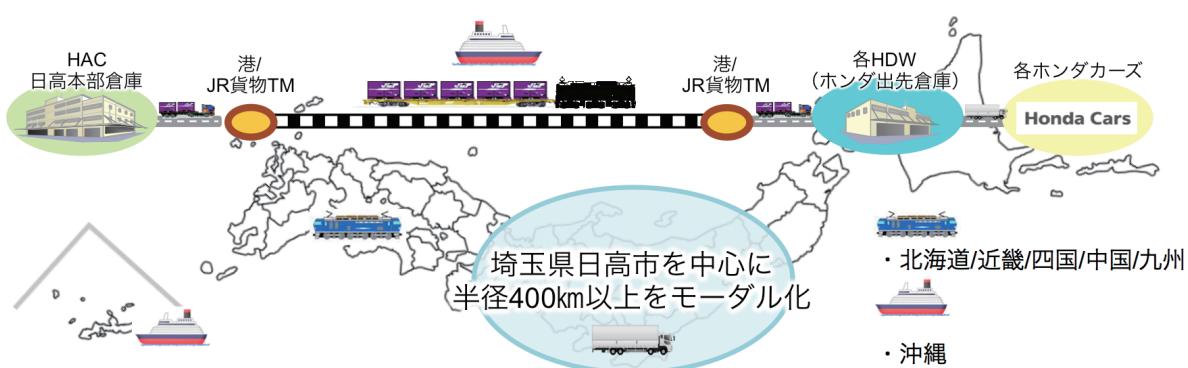


Honda海上輸送 基本航路



鉄道・船による貨物輸送

ホンダ車を購入した際に取り付ける用品(フロアマット/カーナビ等)を全国の出先倉庫へ輸送する手段として、トラックからモーダルシフトすることで環境に配慮し、ドライバー不足への対応を行っています。



パフォーマンス報告

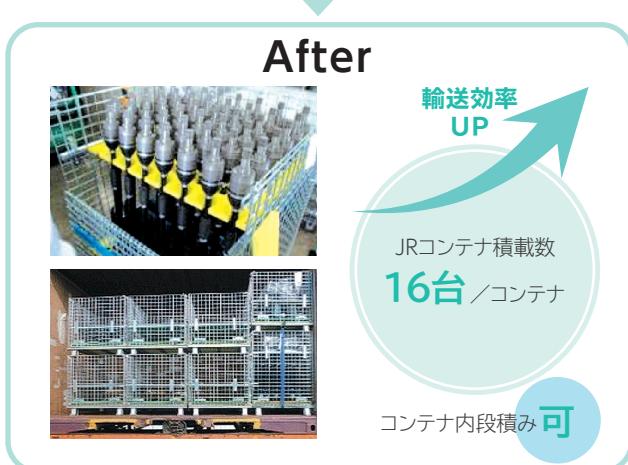
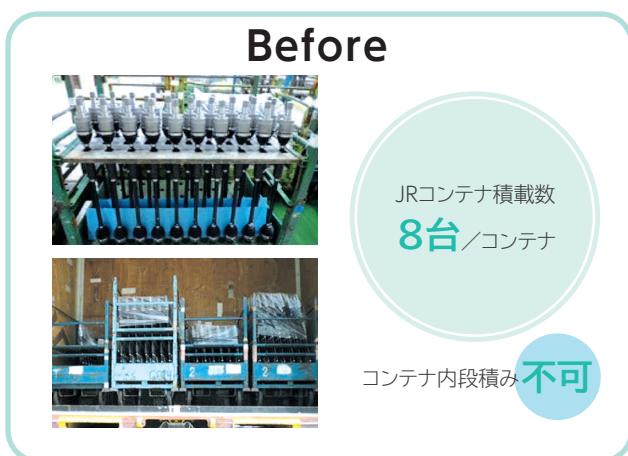
循環型社会への取り組み

物流に欠かせない容器(機器)による環境負荷や廃棄物の削減、資材のリターナブル化に向けて、オリジナル物流機器の研究・開発・製造・販売を行っています。

また、資源循環の実現に向け、使用済みの包装資材の分別を徹底して、金属や紙、ダンボール、プラスチック類などのリサイクルや、搬入ケースのリユースにも取り組んでいます。

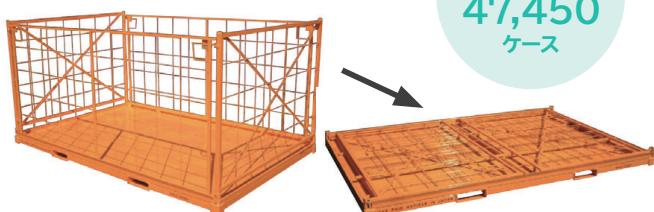
物流機器開発による環境負荷低減への貢献

リターナブルケースを利用した鉄道貨物輸送効率の向上



リターナブルケース商品特徴

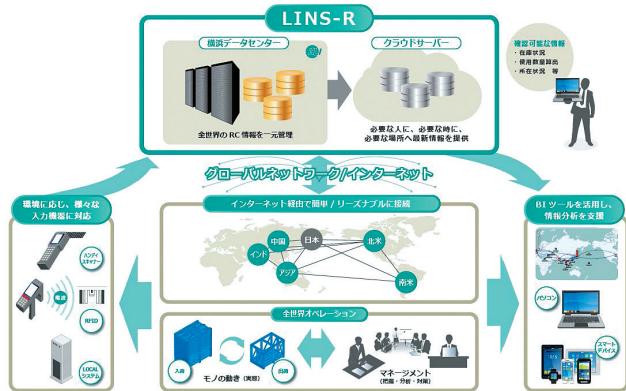
- 繰り返し使用可能なため、廃材処理費を削減
- 回収時の折り畳みによりサイズを縮小化、保管スペース及び輸送費を削減



2024年度
販売実績
47,450
ケース

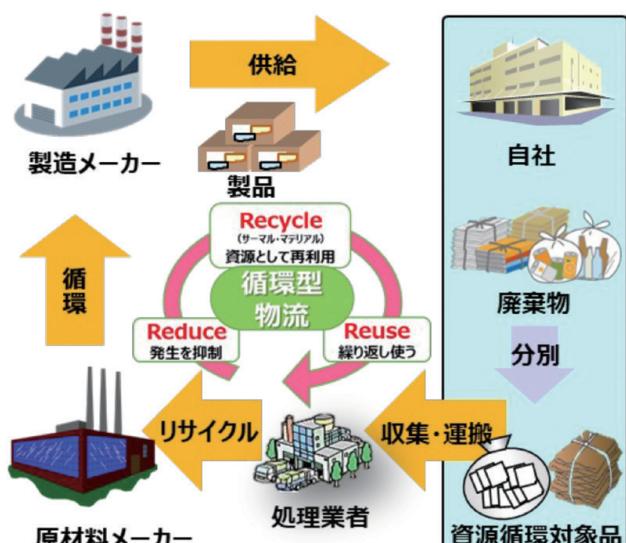
※詳しくは以下の「ホンダロジスティクス」ホームページリンクをご覧ください。
ホンダロジスティクス ホームページ: 物流機器の商品案内リンク

リターナブルケース個体別流動管理システムのご紹介



ホンダロジスティクスで開発した管理システムとHondaのシステムを連動させ、リターナブルケースの入庫、出庫、在庫管理をITツールによって可視化し、リターナブルケース個体単位での動態管理が可能です。

使用済み包装資材のリサイクル



確実な資源循環を行うために、資源循環の標準モデルを構築しています。

パフォーマンス報告

環境啓発活動への取り組み

「改善提案活動」への参画を通して、業務のムリ・ムラ・ムダの排除に取り組んでいます。さまざまな業務改善を行うことで、エネルギー・材料、廃棄物の削減などの環境負荷低減に貢献しています。

改善提案活動

改善提案とは、品質向上、経費の削減、事務／作業効率の向上、職場環境の向上、事故または災害防止、従業員の士気向上等のために有益な意見を提出する事です。

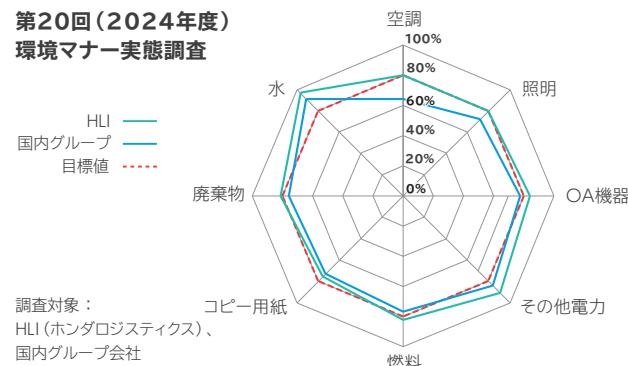
	2024年度 改善提案 実績	
	参加者数	提案件数
栃木	44名	152件
埼玉	80名	348件
静岡	16名	48件
三重	157名	634件
熊本	27名	78件
バーツ用品	54名	180件
本社	55名	180件
合計	431名	1,620件

環境マナー向上活動

従業員一人ひとりが日常の中で環境に寄与できる行動を確実に実践するため、環境マナー向上施策の推進を2009年度から開始し、毎年、全従業員を対象に実態調査を実施しています。

ISO14001:2015に対応して項目の追加・見直しなどを行いながら、全調査項目のレベルアップに向けて更なる活動を推進しています。

第20回(2024年度) 環境マナー実態調査



研修教育

環境取り組みへの認識、意識向上や、環境活動の意義や重要性・社会的責任について理解するために新入社員、新任監督者、新任管理者に対して、環境マネジメントシステムに基づく環境研修を行うと共に環境管理者、環境推進者、環境担当者を対象に環境法令研修等を実施しています。



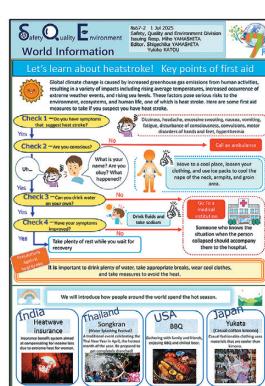
新入社員研修

新任監督者研修

社内コミュニケーション

従業員一人ひとりが環境意識を持って、行動へ繋げられるようにさまざまな啓発ツールを用いて、社内コミュニケーションを図っています。

社内広報(SQEワールドインフォメーション)の発行/掲示



日本語版

英語版

プラスチック資源循環促進法 啓発ポスター



環境活動啓発バッジ配布



パフォーマンス報告

生物多様性

Hondaは企業活動が生物多様性に影響を及ぼす可能性があることを認識し、その重点取り組み領域を「生物多様性ガイドライン」に定めています。

ホンダロジスティクスとしてもHondaグループの一員として、生物多様性の保全への取り組みが必要と考え、CSR活動を推進しています。

森林保全活動

2017年より三重県・菰野町・NPO法人森林の風様の協力のもと「ホンダロジスティクス ふれあいの森 Friendship Forest」を整備し、持続可能な社会を支える大切な財産である森林保全活動に地域社会の皆様と協働し積極的に取り組んでいます。

活動内容として、森林内の間伐や植樹、散策路の整備などを行っています。間伐をすることで、森林内に適度な光が射しこみ、下層植生が豊かになり、多様な生物が生息しやすくなることが期待されます。



「～ホンダロジスティクス～ ふれあいの森
Friendship Forest」森づくり宣言書



森林内にヤマボウシを植樹



散策路の整備



沢の整備

地域清掃活動

各事業所・部では、地域社会の一員としての主体的な活動として、会社の周辺清掃などに取り組むとともに、各自治体や各団体主催の地域清掃や海岸清掃へも参加し、環境美化を通じて地域に貢献しています。



栃木事業所



熊本事業所



静岡事業所



三重事業所



製品物流部



パート用品事業所



埼玉事業所



技術本部



東京本社



福岡オペレーションセンター
(製品物流部 西日本ゾーン)



北海道ブロックホンダ会
おたるドリームビーチ
(製品物流部 北海道ゾーン)



熊本県ホンダ会 御立岬海水浴場
(熊本事業所)



特定外来生物の駆除
埼玉地区では、敷地内に自生していた、
アメリカオニアザミやオオキンケイギク等の特定外来生物を駆除しました。

TOPICS

Honda 軽商用EV(電気自動車)『N-VAN e:』の導入

2024年秋『N-VAN e:』の発売を機に6台導入しました。2025年は11台の導入を予定しています。電気自動車はガソリン車と比較しCO₂排出量を30%削減できる見込みです。

※ EV(電気自動車):電力を使って走行する車で、ガソリン車に比べてCO₂排出量が少なく環境負荷の低減に大きく貢献します。



太陽光発電設備の導入

太陽光発電は、自然由来のクリーンなエネルギーとしてCO₂排出削減に寄与し地球温暖化抑制に効果があります。

2025年には、新たに埼玉、静岡、三重、栃木の4拠点へ導入を進めており、年間828.8t-CO₂の削減が見込まれ今後更に拡大していく予定です。



屋根上タイプ

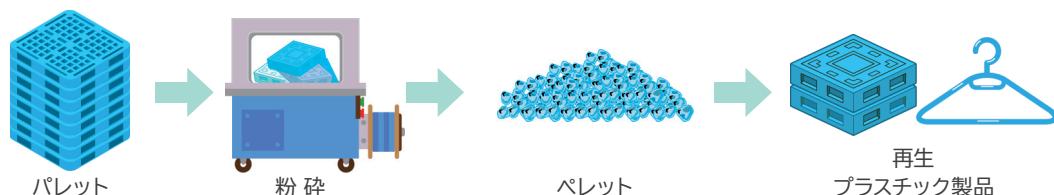


カーポートタイプ

廃棄物削減への取り組み

埼玉事業所では、返却が出来ないプラスチックパレットを長期にわたり廃棄していましたが、再利用業者へ引き渡し粉碎機で細かく碎いてペレット(粒状)にし、新たな製品やパレットの原料にするマテリアルリサイクルへ切り替えました。これにより2024年は、10,960kgもの産業廃棄物(廃プラスチック)削減を実現しました。

※ マテリアルリサイクル:使用済みの製品や部品を原材料に戻し、再び同じ製品や部品の原料として利用するリサイクル方法



『学びの森 ~ Learn more SQE ~』の設営

三重事業所では、安全・品質・環境(SQE)の知識を吸収し感性を磨く教育の場として『学びの森』を設営しました。各部門のヒヤリハット事例から図解や写真など取り入れた資料を掲示し、トラブルを未然に防止できる感性を持った人材を育てる目的で運用しています。



環境報告ガイドライン対照表

環境省「環境報告ガイドライン2018年版」に沿って本レポートを作成しました

	開示事項	ページ
第1章 環境報告の基礎情報		
1. 環境報告の基本的要件	会社情報	2
2. 主な実績評価指標の推移	会社情報	2
第2章 環境報告の記載事項		
1. 経営責任者のコミットメント	環境統括責任者緒言	3
2. ガバナンス	ガバナンス	9
3. ステークホルダーエンゲージメントの状況	ビジョンとマネジメント方針	4-5
4. リスクマネジメント	リスクマネジメント	10
5. ビジネスマodel	ビジネスモデル	6-7
6. バリューチーンマネジメント	バリューチーンマネジメント	6-8
7. 長期ビジョン	ビジョンとマネジメント方針	4-5
8. 戦略	ビジョンとマネジメント方針	4-5
9. 重要な環境課題の特定方法	重要な環境課題の特定方法	8
10. 事業者の重要な環境課題	ビジョンとマネジメント方針、環境目標と実績	4-5、11
主な環境課題とその実績評価指標		
1. 気候変動	環境負荷実績	15
2. 水資源	環境負荷実績	15
3. 生物多様性	生物多様性	19
4. 資源循環接続	循環型社会への取り組み	17
5. 汚染予防	環境マネジメント	11-13

編集後記

弊社環境レポートをご覧いただき、ありがとうございます。

近年、環境問題のなかで特に気候変動問題は、現在では「地球危機」と形容されるほど、我々一人ひとりや地球上のあらゆる生物や植物にとって回避できない喫緊の課題となっています。

日本政府は2020年10月に、2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにする「カーボンニュートラル」を目指すことを宣言しました。それに呼応し弊社としてもより高く挑戦的な目標達成に向けて活動を続けてまいりました。今後も野心的目標を掲げ、着実に実行しながらすべてのステークホルダーの皆様のご期待に応えられる企業として積極的な活動に邁進してまいります。

記載内容についてのお問い合わせ先

SQE管理部
Tel. 059-373-5417
Fax. 059-373-5418

本レポートは、「ホンダロジスティクス ホームページ」にて、
PDF形式のダウンロードが可能となっております。

<https://www.honda-logistics.co.jp/>

発行日：2025年11月

発行：技術本部 SQE管理部

発行責任者：山下 実穂